

---

# ある女神

橙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある女神

### 【著者名】

Z4458Z

### 【作者名】 【登場人物】

橙

### 【あらすじ】

ある女神の恋の顛末。

ええ、やつで「ござります。あなたは私のことを、私以上にわかつていらっしゃる。私はね、自分の身の上を知りません。風が吹けば飛ばされるような、流浪の者ですから。

親兄弟などもとより、一族と申しましょうか、私に似た者のことも知りません。そういう者たちがいるようだとは、幾度か聞いたことがござりますが、ふと氣付けば私は私で、このような様子であります。

由緒などといふものはありません。顔も知らぬ一族の中には、大きなお屋敷を頂いて、ゆるりと暮らしている者もあるそうです。いえ、私などはそんな大層な者ではありません。端者でござります。身の上は知りやしませんが、身の程は承知しております。

「存じのよう」、空っぽの押し入れの棚などをお借りして。どこの家にもありますでしょう、そんな物は。それで、冷えた囮炉裏の灰をね、ちょいとつまんで。総掠いなどいたしません。一つまみ、ちうちう舐めて、それで十分でござります。そんな暮らしをしております。

お笑いになるでしょうが、私にも、ちつぽけな小娘時代がございました。年増女の戯れ事とお聞き流しください。

ええ、あなたのお聞きになりたいことは承知しています。ですがそれにお答えするには、ここから話すしかないのです。なにぶん、学がないので。要領のよい話はできませんので、申し訳ないことです。

屋敷へ玄関から上がるなどといふことは、他のえらい方はともかく、私にはできません。勝手口やら、縁側やら、あとなどこの家にも、「不淨の口」というのがござりますでしょ。そう、身内の不幸のあつた時に開けて、通る口でござります。

この家にはない？ああ、今じゃこんなことも廃れているのですね。その戸がね、何の拍子にか、少し開いていた家がありました。門が壊れていたのでしょうか。その小さな家には、老いた母親と若者が暮らしておりました。

母親の名は記憶にありませんが、若者の名は「清」と書いて、セイと読みました。いい名でしょう？私もね、初めそれが気に入つたんですよ。涼しげな響きに見合つ、田元のすつとした若者でした。

私は清を気に入りましたし、その家も気に入りました。気持ちのよい家でした。庭先から奥の間までよく片付いて、田当たりも風通しもよかったです。

母親は足を患つて、長くは立ち働けないようでしたが、代わりに清が一生懸命働いておりました。

畠仕事も家のことも、ほとんど清が引き受けおりました。清は不満や恨み言など一言も口に出しませんで、お母は休んでると微笑んで、朝から晩までせつせつとよく動き回っていました。馬を引いて畠に行き、竈で飯を炊き、庭を掃き、わらじを編んで売りに行く。一人で、一人分も働いていました。

母親も面倒をかけてすまながつてはいましたが、清を頼りにしているようでした。

立派な若者だと、私は押し入れの中からこっそり見つめて、ますます清のことを気に入りました。

その家は、支え合つ清と母親の深い情に満たされて、とても心地

良いところでした。囲炉裏はいつも温かくて、静かだけれど、血の通った気配がしました。母親の笑い皺や清の穏やかな眉が、炉の火にぱつぱつと照らされて、私までなんだか胸が温かくなつたものでした。

私はそれを、ずうつと見ていたくなりました。それまではねえ、一つの家に、長居したことなどありませんよ。顰め面ばかりの人、不平ばかりの人、世の中のほとんどはそうぞうぞうします。ままならぬ世ですからね、仕方のないことでしょう。

だからこそ、清の家が眩しく、得難いもののように思えました。あんまり心地良くて、離れ難かったのです。

私は押し入れから出て、炉端の下座に座つて手をつきました。どうかこの家においてください、と。流浪の身の上に過分な願いとは承知しておりますが、私もお家のために、微力ながらお手伝いいたしますのでどうか、と申しました。そんなことするのは初めてでしょう、随分緊張しました。情けなくぐぶるぶる震えておりました。もちろん、清たちには聞こえませんよ。でもねえ、どうしてもそうしたかったのです。息を殺して頭を下げておりました。すると、どうしたことかふと、清が顔を上げてこちらを見たのです。

ほんの刹那のことでした。きっと清は、何か柱の虫だか染みだかに、目をとめただけだったのでしょうか。でもその時の私には、まるで許しを受けたように思えたのです。嬉しくて涙が出ました。私も泣くのだと、その時初めて知りました。

その日から、私は清の家の守りになりました。

守りなどと言つても、私には、できることなどありません。けれ

ども家においてもいらうのですから、力をつくさうと奮い立つておりました。福を呼び込むうと、祈りだけは欠かしませんでした。

ええ、とてもとも、身にあるほど幸せな暮らしだけでございました。

ちょうど秋のことで、清の家の畠は見事な豊作でした。忙しくても、冬越しの不安が薄れて、清も母親もよく笑っていました。清と母親の笑顔は、私の糧でした。私もほつとして、よくとれた豆や粟や芋を見ては、晴れがましい気持ちになつたものでした。

お恥ずかしいことです。その通りです。私はね、清を好いていたのですよ。

私も小娘でございました。清に、家にいてもよいと許されたと感じてからは、思いに歯止めが効かなくなりました。清は当然私のことなど、いふとも知りませんでしたけれども。

炉端で藁を編んでいるその背中にそつと近寄つて、ほつれた着物の端をね、ちょこんとつまんでみるんです。そうするとたまに清も、ふつと、何か感じたように顔を綻ばせてくれます。それだけで満足でした。私と清の間に今、何かが通つたのではないかと、その曖昧な感触だけで十分でした。

夫婦になれるなんて思っちゃいません。真似事の虚しさもわかつていました。でもね、ちょっと触れただけで、頬が熱くなるんです。目が眩んで、涙がにじむんです。

あの炉端で、私は幸せがビッグな形をしているのかを、はつきりと知りましたよ。それはそこ、ただ目の前にありました。清と母親に、そして密かに私の内に、確かにありました。

でもねえ、その冬に、清の母親が死にました。

年を越す前の、寒い日でした。朝、母親は起きてこなくてねえ。気付いた時には布団の中で、冷たくなつておりました。

母親は年がいってしましたので、私は天寿だらうと思いました。けれども、清の悲しみは尋常ではありませんでした。

唯一の肉親、最も愛していた母親が死んだのですから。何日も何日も泣き暮らして、そのうち魂が抜けたように虚ろになつて、ついに炉端に座りこんだまま、一步も動かなくなりました。

家の中はほこりが積もり始めました。囲炉裏の火は灰の中に小さく埋もれて、竈も蓋が閉じられたまま冷え切りました。

家は息苦しいほど悲しみに沈んで、私も悲しくて、どうにかしなければと焦つておりました。守りなどと称したくせに、私はあの温かく幸せな家を守れませんでした。我が身が不甲斐なくて、清に申し訳なかつた。なんとしても清だけは守りたくて、私は必死で祈りました。

せめてもと、毎晩清の着物の端をつまんでは、元気を出してと念じました。そうすると清の呆けたような目にふつと力が戻つて、少し持ち直すように思いましたから。

けれども、悪いことは続きました。まず村の名主という人が、母親に貸していた金を返せと家に押しかけてきたんです。清には覚えのないことでした。でも、名主に逆らつちゃ暮らせませんでしょ。

清は仕方なく、払いました。そのせいで新しい借金をしなくてはなりませんでした。

豆や芋を蓄えていた室を、山犬の群れに荒らされたのも痛手でした。あれだけあつた食べるものが一気に減つて、清は冬を越せるか心許なくなりました。年の瀬だというのに、正月の餅どころかその日の食べものにも事欠くという有様でした。

私は、何もできない自分が腹立たしかった。清が苦しんでいるのに、笑つてほしいのに、何の力もありません。悔しくて仕方ありませんでした。もし私がえらい方々のようなら、たやすく福を呼び込めるのにと思つて唇を噛みましたよ。

私はその時改めて、自分の身の上を知らぬことを恥じました。私に何ができるのか、知りたいと思いました。なんとかして、清のお役に立ちたい。私のちっぽけな力をどう使えば、この家を再び温かく満ち足りたものにできるのか、心底わかりたいと思いました。震えるくらいの悔しさを抱えておりました。でも結局私は途方にくれ、ただ清のそばに座り込むことしかできませんでした。

囲炉裏の火はもはや、完全に消えておりました。家の中は暗く陰り、屋根さえ傾いて見えました。温みのない炉端は、悲しいものです。ある日私は冷え切った灰にちゃんと指先をつけて、それをちらりと舐めてみました。

冷えた灰は、私好みの味をしておりました。

私はその時、雷に打たれたように悟りました。自分が、何者であるのかを。

思ひ返せば、その日は大づくもりで「やれこました。自分とこうものをはつきり悟つた私は、もうこの家にはこられないとわかつっていました。

ええもちろん、清のことを愛しく思つていましたよ。ずつと幸せな笑顔を見ていたいと、その思いに変わりはありません。でも、そう思うからこそ、私はこの家を去るほかありませんでした。

私は火の消えた、冷えた団炉裏の灰を好みます。私には福を呼び込むことはできません。そして、なんの力もないと思つていましたが、そうではありませんでした。

ね、そうになりますよ。

暇請いをしようとした私はいつかと同じよう、炉端の下座に背筋を伸ばして座りました。清は田の前で、背を丸め、打ちひしがれてあぐらをかけておりました。

清さん、と、私は破れた着物の端を、いつもよりちょっとひんやりと田をさ迷わせました。

すると清は、はつとして顔を上げたのです。

清がそんなことをしたのは初めてでした。そして何かを探すよう、うるわしく田をさ迷わせました。

姿を、どうか姿を見せておくれ。

顔も名も知らぬ。けれどお前が必ずひそばにいてくれた。それは知っている。

今、わしの袖を引いたる? ビーにこる? ハーに、いるのか?

私は凍りついて、ちぢとも身動きできませんでした。

息が詰まつてねえ。清の呼び掛けに、答えられませんでした。

清はこけた頬で、宙に向かつて、ふつと微笑みました。

お前が袖を引いてくれると、わしは一人じゃないと思えたよ。お母も死んでしまつた。わしにはもう、お前しかいないよ。ずうつと、ここにいてくれよ。

清が幸せそうに笑うので、私はもう、胸がいっぱい、痛くて痛くて、涙がとまりませんでした。

清に申し訳なくて、自分の身の上が憎くて、たまらず私は伏して許しを請いました。

清さん、清さん。

申し訳なかつた。私はこの家にいちゃいけなかつた。お前様を好いちやいけなかつた。

お前様のご不幸は、すべて私の咎でござります。この家の炉の火

を消したのは私でござります。お母様を殺したのは、私でございま  
す。

嗚咽を堪えているせいで、声は震えて録に出ませんでした。胸を搔きむしりたいような後悔で、私は額を床に擦りつけました。

どうして、私などがこの世にいるのか。

清と母親の笑う温かい炉端に、私は決して近づいてはならなかつたのです。押し入れからこつそり覗き見て、それで満足して、そのまま立ち去るべきでした。

私がいなければ、この家の温かな炉端は、守られたのです。

むせび泣いて、私は清に何度も何度も謝りました。どれほど声を枯らそうと、清に聞こえないことはわかつっていました。それでも私は、謝ることしかできませんでした。

家の外では、横殴りの雪がこうこうと降つてありました。寺が除夜の鐘をつく前に、私は清の家を去りました。

さあ、これが、私のたつた一度きりの、恋の顛末でござります。

ええ、あなたのお聞きになりたいことは、ちゃんとお答え申し上げます。まず私が何者か、といつひとでしたね。

今の話でねえ、もうおわかりでしょう。私は自分の身の上を知り

ません。私を何と呼ぶのか、名を知りません。ただの流浪の者でございます。

でもあなたは「存じでしょ」、私が何を運ぶ者か、といふことは。

そしてね、私は、もう一度と恋などいたしませんよ。

私が好いた人は、幸せでいられないのです。今お話しした通りです。囲炉裏の灰を冷やすのが、身に課せられた私の性なのでござります。

恋などといふものは、あの家の炉端に置いてまいりました。

だから、ねえ、そんなことをおっしゃらないでください。私を望むなど愚かなことです。あなたは今や、立派な蔵持りじゃありませんか。煙草の栽培が当たつて、大変めでたい」とドジでしゃります。借金どころか土地持ちになられて。

お嫁様は働き者、後継ぎの息子さんも聰明でいらっしゃって、あなたの若い頃を見るようです。

あなたは私に返すべき恩など、これっぽつともなにのですよ。

私は、一度と恋などいたしません。

でも、先程も申し上げました。あなたの笑顔をずっと見ていました。その思いは変わらないのです。

そして、そのために私ができることも、変わっていないのですよ。

ねえ、清さん。

私はあなたにだけは、幸せを運ぶ者でありたいのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4458n/>

---

ある女神

2010年12月14日21時02分発行